

対象と論理

——マイノングとラッセル

本論文は、ラッセルのマイノングに関する考察を通じて、ラッセルの思想の特色を明確化することを目的とする。ラッセルとマイノングとの対比ということであれわれが最初に思い浮かべるのは「表示について(On Denoting)」におけるラッセルのマイノング批判であろう。広く知れわたった理解によれば、ラッセルはこの論文において、「丸い四角」や「黄金の山」といういわゆるマイノング的な対象を「矛盾律を犯す」として批判し、そのような表現を含む命題に対してその存在にコミットしない解釈を与える「記述の理論」を考案したとされる。しかし、この「表示について」において簡単に片付けられてしまっているマイノングに関する考察は、ラッセルがマイノングをどのように捉えていたかを正確に表すものではない。本論文は、ラッセルのマイノングに関する考察を取り上げることにより、ラッセルとマイノングが一定の共通点を有していた一方で、ラッセルがマイノングの対象論を彼独

特の「論理的観点」から批判検討していたことを明らかにする。彼のマイノング批判に見られるこの態度を明確化することとで、彼の一般的な哲学的方法に関する示唆を得るのが本文の目的となる。

このことを示すため、本論文は以下のように構成される。第一節で、ラッセルとマイノングの「共通部分」を論じる。ここでは、ラッセルの「論理学」とマイノングの「対象論」が、双方の学問観という点で共通していたことが示されるであろう。第二節で、ラッセルのマイノング批判を論じる。マイノングが主張する、諸対象に関する関係や階層についてラッセルがどのように批判したかを確認することにより、ラッセルにおける「対象」と「論理」のつながりを明確化するのがこの節の目的となる。

西 村 敦

1. 1 論理主義における論理学の位置づけ

本節では初期ラッセルとマイノングの「共通部分」を論じる。従来、彼らの共通部分とは、よく知られる存在者間の分類、すなわち「実在 (existence)」と「存在 (being)」の区分にあると考えられてきた。しかし、マイノングの分類における詳細さ、そして、それと認識論や心理学との強い結びつきを考えると、この存在者間の分類という観点はそれほど両者の共通点の重要な部分を明確にするものではないと思われる。それに対しわれわれがこの節で注目したいのは、彼らがそれぞれ、一つの新しい学問、すなわち、ラッセルは新たな「論理学」を、マイノングは「対象論 (Gegebendstheorie)」を考案し、その必要性を訴えたということである。これは、彼らがそれぞれ単に新しい学を導入したということのみを意味するものではなかった。十九世紀後半から二十世紀にかけての激動する学問状況の中で彼らが導入した新しい学は、そのような状況に一石を投じる「基礎学」という意味合いをもったものだったのである。以下では、ラッセル、マイノングがこの基礎学の必要性をどのように論じたかを検討することで、彼らの共通部分が、この必要性の根底にある「学問状況の理解」にあったことを確認する。

まず、ラッセルから確認しよう。初期・中期の彼を特徴付ける思想的立場は、言うまでもなく数学を論理学的概念によって導出できるとする主張、すなわち「論理主義」である。彼の論理学はこの立場を擁護するために新たに導入されたの

であり、よって、先述の論点、すなわち論理学を彼がいかに「基礎学」と見なしたかは彼のこの思想的立場と深く関わっていると考えられよう。それでは、その思想的立場を特徴付けるものとは何か。それは、彼の中で、この立場がいかに現状に対して要請されるものであったかを考察することで明確になると思われる。彼は、『数学の原理』(Principles of Mathematics、以下『原理』)の最初の部分で、数学という学問を巡る状況に対して、次のような不満を述べている。

数学が何らかの意味で正しいと言うことは一般的に認められているにもかかわらず、哲学者は数学的命題が本当は何を意味しているかについて言い争っている。すなわち、何かは真であるのに、二人として何が真であるのかについて一致を見ず、また何かが知られたのに、何が知られたのかについては誰も知らないという状況なのである(1)。

すなわち、彼は、数学という学問に対する従来の対象観、あるいは真理観が、数学という学問の現状に全く合致していないということを問題視していた。しかし、この不満は何に向けられていたのか。この発言から分かるのは、彼が数学の現状について不満であり、それを解消すべく数学の基礎付けが必要である、と考えていたわけではないということである。むしろ彼の不満は、現にある数学という学問における対象、あるいは正しさを与える基準が不在であるということに向け

られていたと考えられる。そして彼は、論理学の道具立てによつて、このメタ的視点の不在という状況を改善することを、数学の現状において要請されていることと捉えていたのである。

このような要請を考慮に入れたとき、彼にとつて数学を導くといわれる論理学とはどのような学問でなくてはならないだろうか。それは、現にある数学という学問に対して、いわば論理学の優位を主張するものではない。むしろ、その論理学によつてなされる数学の導出は、現にある数学の特徴に合致することが求められるものとなるのである。それでは、その当時にあつても目覚ましい発展を遂げ続けていた数学を特徴付ける重要な要素とはなんだつたのか。われわれは、こと十九世紀の数学の発展とラッセルの思想を考慮に入れたとき、その要素として二つ挙げられると思われる。一つは、数学の「純粋性」である。例えば、十九世紀にはじめて導入された極限の基礎や無限数は、前者が物理学的考察によつて肯定されたり、あるいは後者が心理学的考察によつて否定されたりするようなものではなく、厳密な定義により与えられるものとなった。これは数学が、それが扱う概念を自らの定義のみによつて生み出すものとなったことを示すであらう。もう一つは、前者と関連するが、数学の「非現実性」である。数学の発展に伴い、数学の対象、例えば非ユークリッド空間などはそれが「現実」に可能かどうかというような論点から肯定されたり否定されたりすることはなくなつた。それは、最初に（現実との対応やそれへの適用可能性という）正当化

が与えられるのではなく、最初に定義が与えられるものと変わったのである。

これらの数学の特徴は、彼が『原理』において与えた論理学の特徴、そしてそれについての論述を、以下の二つの意味で規定するものであつた。まず、彼は数学を導き出すものとして論理学が満たさなければならぬ先述の条件が、従来のとりわけ心理的要素を含んだ論理学によつては満たされないことを自覚していた。その彼にとつてしななければならなかつたのは、これらの条件を満たす論理学を新たに作り出すことであつた。ラッセルが作り出した『原理』における「論理学」の特徴は数多く枚挙されうるが、先述の論点にとつて重要なのは次の二点であらう。その一つは、論理学が用いる道具立てとその性質に関してである。彼は『原理』における論理学の本体を「純粋数学」と述べ、それらを構成する要素を「定義できないもの (indelinables)」と呼んでいるが、これは数学における純粋性を保持ために行われた、論理学に対する純粋性の表現と見ることができる。彼は、このような「純粋に」論理学的な概念からはじめることで、数学は構成されねばならないと考えたのである。もう一つは、論理学が前提とする存在論である。数学的对象やその考察を現実性から制限することが不適と考えられる以上、その数学を構成するとされる論理学の存在論も、当然「現実を超えた」ものでなくてはならないであらう。彼の「項」の規定が、「實在」に限定されない、幅広い存在論的カテゴリーである「存在」を認めるものであるというのはこの要請を受けてのことであると考えると

れる。それは、単に哲学的な存在論的宣言ということの他に、数学を導くものとしての論理学に要請された存在論という意味合いを強く持つものであると思われるのである。

先述のことから分かるように、彼が『原理』で行った中心的なことの一つは、新たな論理学の構成であった。しかし、同著においてそれは同時に、伝統的な論理学に対していかに自らの論理学が正当性を持つものであるかを示す作業と同時に行なわれたのである。これが、『原理』における先述の論理学の論述の特徴の二つ目のものに当たる。彼の論理学の刷新は、当然ながら従来の「論理」の常識を覆すものであったので、この常識に反するところの彼の「論理」がむしろ本来の論理であることを示すことは、彼の新たな論理の創造に必然的に伴う作業だった。そしてそれは当然のことながら、従来の（心理的要素を含んだ）論理学が、彼の提出する新たな論理とそれが含意する様々な立場を考えると、真の意味で論理とは言えないという論点を含むものだったのである。

このように彼は、「現にある」数学を導き、それに対する確かなメタ的視点を供給するものとして論理学を考える際、数学の重要な特徴を受け継ぎ、しかもそれによって十分に数学を導けることが保証されるよう、それを新たに構成しななければならなかった。また、そのために彼は、数学の導出のためには決定的に不十分であった従来の論理学を批判し、それに対して自らの論理学の正当性を示さねばならなかったのである。

1. 2 学問の中の「対象論」

マイノングは一般的にはその独特の「対象論」で知られている。しかし、ラッセルと対比された形でマイノング研究は、「表示について」におけるラッセルの「マイノング的研究は矛盾する」という議論を受けての、その対象論の整合性に関するものであることが多い²⁾。しかし、われわれが先述との関連で注目するのは、マイノングが「対象論」をどのような学として位置づけていたか、である。以下では、彼の1904年の著作『対象論について (Über Gegenstandstheorie)』を取り上げ、この対象論に関する彼の学問観を確認することしよう。

マイノングは同著において対象論の学問的位置づけを論じる際、その在り方とは対極をなす一つの対象に関する立場、すなわち、「現実的なものへの先入観」と彼が名づけるところのものを提出し、これと対比する形で彼の対象論の正当化を与えている。ここで、この「現実的なものへの先入観」とは、彼が実際の学問状況において明確に念頭にあった人々、特に心理主義的な傾向をもつ人々の考えであるが、ここではわれわれの様々な知的態度が向かう先を「現実」のものに制限しようとする傾向であると理解してよい。よってわれわれは、この対比を検討することで、同時に彼の対象論に対する学問的位置づけを見ることができると思われるのである。以下、それを確認しよう。

まず、マイノングと「対象論」というと、「黄金の山」や「丸

「四角」などの「現実には存在しない（あるいはいえない）」対象が連想されるであろう。確かに彼は「対象論」を論じるに当たり例としてこのような対象を頻繁に持ち出すのだが、彼の興味関心は、必ずしもこれらを含む形而上学が無矛盾性や整合性をもつかというだけではなかった。むしろ先述の著作の興味関心は、そのようなものも含めた「非現実的なもの」、「彼が挙げる例によると「関係」や「差異」などの抽象概念、また未来の出来事や空想上のものなどの諸対象が、われわれの思考に現れることができ、あるいはそれについての考えを他人に伝えることができるという明確な一つの事実にあった。われわれはこのとき、当然ながら「現実的なもの」について考えているわけでも、それによって制限がかけられているわけでもない。思考というものがもつ一つの特徴は、現実的なものに限らない様々な可能性を対象にすることが出来るということであろう。しかし、ここで彼の指摘する「現実的なもの」の「先入観」により、この思考が向かう先の対象が「現実的なもの」に限られてしまうとすると、われわれは思考可能性についての十分な理論を構築することが出来なくなると彼は考える。彼は明確に、われわれの認識作用と、その作用が志向する先を区別し、この認識の向かう先にあるものが認識の前提となつていと主張する。このことから彼は、その作用が向かう先の対象についての学問、すなわち対象論が、あらゆる思考可能性、すなわちあらゆる学問の扱う対象を供給するという意味で要請されると考えるのである。また、ラッセルとの関連で興味深いのは、彼がこの対象論の

必要性を、特に「数学」を例に出して主張している点である。彼は「対象論」が一般的なものであるならば、それはあらゆる学問の対象を扱うものではなくてはならないと考えた。それはもちろん数学も例外ではない。そして、数学が扱う数学的对象は当然ながら「實在」するものではなく、それとは違う意味で「存在」するものである。すなわち、彼の与える「対象論」は、数学を含めた一般的なものであるために、「實在」より広い存在者を扱うものではなくてはならない。そして、この対象論によつて供給された対象が数学に与えられることで、「数学は何を扱うのか」ということに関する不安定な状況を脱することができると思はれたのである³⁾。

先述のことから分かるように、彼の問題意識は一貫して「学問の中の」対象論であった。すなわち彼は、学問や思考一般を包括的に考える際の新たな枠組みとして、この拡大された意味での対象論が「一般学」として要請されると考えたのであり、彼の視点は明確に学問全体を射程に捉えるものだったのである。しかし、その「一般学」の要請に關しても一つ見過ごされてはならない点がある。それは、彼の現在の学問状況に関する不満である。つまりその要請の根底にあったのは、先に触れた「現実的なものへの先入観」から示唆される通り、既存の「対象」についての学問（彼は形而上学を挙げてゐる）の枠組みが、諸学が扱う対象を十分に供給できていないということだったのである。

われわれはここに、マイノングとラッセルとの明らかな類似を見ることが出来るであろう。両者は、まず現にある学問

を捉える基礎的な枠組みが不足しているという問題意識をもに持っていた。そして、ラッセルならば論理学の、マイノングならば形而上学の枠組みを作り替え、それを「基礎学」として提出することで、この状況を打開しようとしたのである。われわれはこのような両者の学問状況の理解、そしてそれに基づいた彼らの新たな学の意味付けこそ、彼らの興味深い共通点として注目すべきであると考えるのである。

2. 分析と構成 — ラッセルのマイノング批判

この節では前節とは逆に、ラッセルがマイノングに見出した問題点に焦点が当てられる。われわれは前節で、双方の共通点を「基礎学の確立」という点に求めた。しかし、われわれは、両者がその方向性という点で一致していたとしても、双方にとつての基礎学の内容の違いを無視すべきではないであろう。しかも、ラッセルにとつての「基礎学」は、『原理』時点では数学（や一部の物理学）のみに向けられたのであり、これはマイノングの一般的対象論が目指す先とは明確に目的が異なるものである。しかしわれわれは、ラッセルがマイノングに見出した問題点の検討は、ラッセルが同じ「基礎学」を取り扱ったものとしてマイノングを批判したという側面を明らかにし、ゆえにそれはこの相違点を止揚するものであると考える。結論から言えば、マイノングが対象論を基礎学に据えるときのラッセルの批判点は、そこにおける「論理的観点」の欠如であり、それは「基礎学」は「論理的」でなくてはならないという彼の思想を表しているのである。以下

では、ラッセルが「マイノング」でマイノングを論じた論文「複合的なものと仮定に関するマイノングの理論 (Meinong's Theory of Complexes and Assumptions)」における、マイノングの著作『高位に分類される対象とその内的知覚の關係について』(Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung、以下「対象と知覚」)に関する彼の批判を手がかりにこの点を明らかにしていきたい。

この論文でラッセルはマイノングが提出する様々な論点について批判、検討しているが、その中でわれわれの議論と最も関係するのは、『対象と知覚』における「低位のもの (inferiora)」と「高位のもの (superiora)」という概念に関するラッセルの批判であると思われる。よって、まずわれわれはこの「低位のもの」、「高位のもの」とはどんな概念なのかを確認しよう。この概念について、マイノングは次のように説明する。まず彼は、一般的な意味での「関係」、「4つの木の実」、「メロデー」などを例に挙げ、これらが全て「前もってその要素である何かが存在しなければありえないもの」である点に注目し、この特徴を受けてそれらを「高位のもの」であると言う。この逆に、彼にとつてこの「高位のもの」の存在に前提とされる要素は「低位のもの」に分類される。例えば「メロデー」について考えよう。これは音の集まりによつて構成されたものであるが、われわれはこの対象を、それが構成する個々の音なしでは考えることが出来ない。すなわち、「メロデー」という対象は、その存在を個々の音に依存していると言えるのであり、「メロデー」が「高位の

もの、「それを構成する音が「低位のもの」となる。「関係」についても彼は同様と考える。なぜなら、彼は関係という一般的概念は、その関係される具体物がなければありえないと考えたからである。よって、関係概念はこの関係される具体物に対して「高位のもの」となり、その具体物がそれを構成する「低位のもの」となる。他の例についても同様に考えられよう⁴⁾。マイノングのこの説明から分かるように、彼がこの概念を論じるのは、彼が対象の間に「何かが存在するためには、既に何かが与えられていなければならない」という階層があると考えていたからである。そして、本論文ではこの先触れられないが、この「高位の対象」に対してわれわれの知覚がどのような関係にあるかが、この著作で中心的に論じられることになるのである。

以下で確認するのは、ラッセルのこの分類に対する批判なのだが、ここでわれわれはこの批判を理解するために、この批判と関連する概念を、ラッセルの問題関心と関わる形で整理したい。ある対象を前提として別の対象が構成されていくという事態は、ラッセルも当然注目するものであった。それは、彼の論理学において中心的な役割を担う、「表示句」や「命題」において顕著に現れる事態だからである。このことからわれわれは、先述のマイノングの概念に対するラッセルの理解は、彼が「表示句」や「命題」の「構成」をどのような概念で捉えていたかが深く関連すると思われるのである。では彼はこれらの概念をどのように考えていたか。まず基本的なこととして確認できることは、彼が「表示句」や「命題」を

「複合的なもの (complex)」、そしてそれと対比される形でその構成要素を「単純なもの (simple)」と呼んでいるということである。彼がこのような名付けを行うのは、現在問題となっている「構成」と並んで、それらの用語から自然に導き出されるある概念を重視していたからであると思われる。それを明らかにするためには、まず「構成」が「複合的なもの」と「単純なもの」の関係を表す概念であることに注目するのがよいと思われる。すなわち、われわれは彼の問題関心を用いてこれらの概念の間の関係の一つを、「複合的なもの」は「単純なもの」から「構成」される、と言い表すことができるであろう。しかし、何かが何かの構成要素であるということはいかにして分かるのか、という観点から「複合的なもの」と「単純なもの」との関係を見ると、われわれは「構成」と表裏一体の概念を見出すことができる。すなわち、「単純なもの」は「複合的なもの」から「分析」によって見出されると言えるのである。よって、われわれはマイノングにおける「高位のもの」、「低位のもの」に対するラッセルの批判を、そこに見られる「構成」という概念を手掛かりとして、ラッセルの問題関心へと引き移した形で考察できると思われる。すなわち、それは「表示句」や「命題」などの「複合的なもの」に関する概念、つまり「単純なもの」、「複合的なもの」、そして「分析」、「構成」という概念を通して理解することができるのである。われわれは以下で、マイノングの概念から導かれる「単純なもの」と「複合的なもの」を、「分析」、「構成」という観点からいかにラッセルが「論理的」に批判した

かを確認したい。

まず「単純なもの」から検討していこう。マイノングの対象の分析、とくに「高位のもの」、「低位のもの」を論理的観点から捉えていたラッセルにとって、「単純なもの」とは「それ以上分析できないもの」を意味した。ここで、先述のマイノングが与えた「高位のもの」の具体例を確認しよう。彼は「青と緑の違い」における「違い」という概念は、「青」と「緑」がなければ存在せず、これらにその存在を依存しているという意味で「高位のもの」であると考えた。ラッセルはこのマイノングの見方を批判する。その理由は、これがラッセルにとって、対象の分類に関する「心理的観点の混入」と考えられたからである。確かに、われわれにとつて「違い」という比較的抽象度の高い概念は「青」と「緑」という相対的に具体的なものを与えられなければ把握できないものであり、その点でこの概念は具体物から構成されると言える。しかし、ここで述べられているのは、われわれが「違い」という概念をどのようにして理解するかという、われわれの認識の側の順序である。この順序は、対象に即した順序、あるいは論理的な順序と一致するとは限らない。ラッセルはある抽象物も、具体的なものと同様単純なものでありうると主張する。例えばこの「違い」という概念である。この概念は、他の概念によつて定義することは難しく、かえつてあらゆる概念の存在にこの概念が前提とされるという意味で単純な概念であると彼は考える。また、彼が『原理』で枚举した「定義できないもの」は、高度に抽象的な概念でありながら、まさにその定

義上「単純なもの」でなくてはならないであろう。このようにラッセルは、対象の間の真の序列と、われわれの認識の側からの序列とは厳然と区別されるべきであり、この混同は彼が強くその混入を排除した「心理的要素」を対象の理論にひいては論理に混入することになると主張する。彼は、「単純なもの」は認識の観点からの理解しやすさ、あるいは自明さではなく、優れて論理的な意味での「分析」によつて見出されるべきであると主張するのである(5)。

次にわれわれは「複合的なもの」に関する批判を検討するが、この検討に移る前に、われわれはラッセル、マイノング双方が有していた、「高位のもの」、あるいは「複合的なもの」の構成に関するある共通の問題意識を確認しておきたい。それは「ブラッドリーの背進」として有名な、「複合的なもの」の分析に関するアポリアである。まず、「複合的なもの」とは、確定記述や命題など、複数のものによつて構成される対象であるが、この対象は「単なるものの集まり」ではない。それは、この集まりが何らかの仕方ですべて「統一」されたものである。しかし、その統一は何によつて担保されるだろうか。われわれは仮に対象 a 、 b が r という関係にあると考えよう。まず、われわれは r が a と b を統一する要素と考えられるように思える。しかし、われわれが考えていた複合体は「 a と b が r という関係にある」というものであったから、 a と b のみの統一を与えるこの関係 r はこの全体に対して統一を与える要素ではない。それでは、この a 、 b 、 r を統一させる要素 r' があると言えるだろうか。この r' は a 、 b 、 r に対して、それ

に「統一を与える」という関係を持つ。そうすると、この事態が成り立つためには、単に r' 、 a 、 b 、 r が集まるだけではなく、それが何らかの統一をなす必要があるだろう。そうすると、先と同様にその統一は r' 自身によつては与えられず、更に新たな要素 r'' を導入しなければならぬ。このようにして無限に続くのである。われわれは以下で、両者がこの問題に対してどのような態度をとったかを確認し、それによつてラッセルの批判の論点を明確化したい。

まずマイノングはこの問題をどのように考えただろうか。『対象と知覚』においてこの問題は何度か触れられているが、それらを見る限り彼はこの無限背進を「問題」と捉えていなかったように思える。彼はこの背進に見られるような関係 r' 、 r'' らを、単に「そのようなものも考えることができる」というように理解しており、この背進が統一の問題を真に脅かすものとは考えなかった。彼は、上で述べた無限に考えられる関係 r' 、 r'' に関して、次のように述べる。

何よりも、直接的な経験に関して次のことは疑い得ないであろう。すなわち、あらゆる複合的なものに対して、(最初の関係である) r は、後の全く単調な関係 r' 、 r'' より特権的な特徴が与えられているのである。これに対してわれわれは、 r を主要な関係、 r' 、 r'' らを副次的な関係と位置づけることで十分であろう(6)。

これは、「複合的なもの」に対してあくまで「特権的な要素」

としての関係 r が存在することを指摘すれば、先の「統一」の問題に対しては十分であるとマイノングが考えていたことを示している。なぜなら、彼は r' 、 r'' …という無限背進は、 r を a 、 b と存在者として「同等の」種類の要素と見たときに、その統一を考えるべく要請されたものに過ぎないものと考えたからである。彼はこの r は、最初に与えられた複合体に対して現に特権的な「高位のもの」である以上、この無限背進の問題は見せかけであると考える。統一という問題が起るのは、同等の存在者である a 、 b に関してのみであり、それは r によつて実現される。そして、そのとき r はこれらの要素を結び付けるべく、統一の問題の埒外にある形式的な概念として裏に隠れるものと考えられるのである。

対してラッセルはどうであろうか。彼はマイノングとは対照的に、このブラッドリーの背進を真に問題と感じており、その脅威は先述のマイノング的な解決では取り除かれなかった。現にこのことに関してラッセルは、「論理的問題が存在するのだが、マイノング氏はそれに完全には気付いていないようである」と述べているのである(7)。しかし何がとりわけ「論理的問題」なのだろうか。そのことを確認するには、まず彼が「複合的なもの」に関してどのような関心を持っていたかを知る必要があると思われる。彼は『原理』で次のように述べる。

「AとBは違う」という命題を考えよ。この命題を分析するなら、この構成要素は「A」、「違い」、「B」だけで

あるように思える。しかし、この構成要素を単に並べただけでは、命題は再構成されないのである。(8) (傍点は筆者による)。

われわれが注目したいのは、彼がここで「単に並べただけ」では「再構成」されないと述べているということである。これから自然に生じる問いは、では何によって「再構成」されるのか、と言うことであろう。すなわち、彼の問題関心は「單純なものの集まり」から「複合的なもの」という質的变化を「構成するもの」とはなんだったのか、ということなのである。この観点から見たとき、上述のマイノングの解決はラッセルにとつて不十分なものであった。なぜなら、マイノングの解決は、「現にある複合的なもの」に対して、その問題を生じさせない要素間の解釈を与えるに留まり、この質的变化に伴う「飛躍」を無視しているからである。ラッセルにとつて「複合的なもの」は「最初に前提されるものではなく、「構成」されなければならないものであった。では、彼はどうか考えたのか。彼はつぎのように述べる。

したがってわれわれの複合的なものを特徴付けるのは、その要素ではなく、單純にして唯一の、ある仕方において「関係している」という事実である。……私が複合的なものの概念を特徴付けるときに主張すべきは、この特別な、そして「定義できない」と思われる種類の統一である(9)。

彼の解決は、「複合的なもの」はその構成要素である「單純なもの」と、この定義できない「関係しているという事実」から「構成」されるというものであった。ここで、この「関係しているという事実」はブラッドリーの背進の問題から、何らかのモノとして、それが関係づけるものと同様のレベルで考えることができないものである。これは先のマイノングにおける関係 r と同様の位置づけを持つように思われるが、次の点は重要な相違と言えるであろう。すなわち、マイノングにおいては、関係 r によつて「ブラッドリーの背進」の問題は解消され、無効となつたのに対し、ラッセルにおいては、この「関係しているという事実」が、当の飛躍を埋め、問題を解決するものと考えられたのである。彼らのアプローチがこの問題に対して実際どのように機能するかは、本論文の論点とは独立した興味深い問題であるが、ラッセルのマイノング批判を通じて彼の思想の特色を明示化するというわれわれの目的にとつて、以上から導かれる重要な点は次のことである。すなわち、ラッセルがマイノングにおいて見過ごされていると主張する「論理的問題」とは「構成」の問題であり、その問題に必要な構成要素を枚举することで先に触れた「飛躍」を埋めるのが、彼にとつてのこの問題の「解決」だったのである。

以上をまとめよう。ラッセルはマイノングにおける「低位のもの」、「高位のもの」という概念を、まず「單純なもの」という観点から批判した。これはマイノングが、論理的観点ではなく認識論的観点から「対象」を分類したという意味で、

彼の対象の「分析」における誤りを指摘したと見る事が出来る。そして、「複合的なもの」について彼は、その複合的なものがあるために何が必要かという、「構成」の点において、マイノングにおける「論理的」不徹底さ、すなわち「飛躍」を批判した。われわれはここに彼の対象と論理の明確なつながりを見ることが出来るであろう。つまり、彼のマイノング批判が示すのは「対象」を論理的観点における「分析」と「構成」によって捉えるべしという、彼の対象・論理観であったと言うことができるのである。第一節とのつながりを考えるならば、それはこう言い換える事が出来るであろう。すなわち、対象論が基礎学たるならば、それは論理的観点によって行われねばならないのである」と。

結語

ラッセルが「論理」によって「哲学」を構築する方針を明確化し始めたのは、『プリンキピア・マテマティカ (*Principia Mathematica*)』以後のことであるが、その際の彼の基本的な考え方は、単に哲学に論理学が持つ厳密さや対象間の関係の明晰さを導入するということではなかった。例えば「外的世界の知識」(*Knowledge of External World*)では、感覚可能なもの (*sensibilia*) から出発して、論理学的・集合論的道具立てを用いて物質世界、心的世界を構成する試みが行われるが、その目的は、これらの二元論(あるいはそのどちらかのみの一元論)が引き起こす問題(典型的には心的存在がいかに物的対象を認識できるのかという問題)の解決を意図したものであ

であったといえる。すなわち、彼の哲学における論理の活用には、論理の活用が哲学的問題に対して解決を与えうという、彼の根本的な哲学観があると思われるのである。そう考えると、われわれが本論文から結論付けるべきことは、単にラッセルが論理的観点に基づいてマイノングを批判したということだけに尽きるものではない。われわれが見て取るべきは、この、哲学における論理の重視、そして論理の活用による哲学的問題の解決という彼の基本方針が、初期ラッセルのマイノング批判において既に彼の基本的な哲学的立場として見てとれることができるということだと思われるのである。

【註】

- (1) Bertrand Russell, *Principles of Mathematics*, London, Routledge, 1992, p. 4.
- (2) マイノングの形而上学の整合性について論じた論文は枚挙にいとまがないが、特にラッセルとの関連が見られる論文として以下を挙げておく。Nino Cocchiarella, 'Meinong Reconstructed Versus Early Russell Reconstructed,' *Journal of Philosophical Logic*, 11 (1982), pp. 183—214; Janet Smith, 'The Russell-Meinong Debate,' in *Philosophy and Phenomenological Research*, 45 (1985), pp. 305—350; Peter Simons, 'On What There Isn't. The Meinong-Russell Dispute,' in *Philosophy and Logic in Central Europe from Bolzano to Tarski*, Dordrecht, Kluwer, 1992, pp. 159—191; Maria Reicher, 'Russell, Meinong, and the Problem of Existent Nonexistents,' in *Imagine, Guido and Linsky Bernard* (eds.), *On Denoting: 1905–2005*, Munich, Philosophia, 2005,

- pp. 167—193.
- (∞) Alexsius Meinong, *Über Gegenstandstheorie: Selbstdarstellung*, Hamburg, F. Meiner, 1988, pp. 3—5.
- (∇) Alexsius Meinong, 'Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung,' in Rudolf Haller and Rudolf Kindinger (eds.), *Gesamtausgabe: Abhandlungen zur Erkenntnistheorie und Gegenstandstheorie*, Graz, Akademische Druck u. Verlagsanstalt, 1971, pp. 379—388.
- (12) Bertrand Russell, 'Meinong's Theory of Complexes and Assumptions,' in Alasdair Urquhart (ed.), *The Collected Papers of Bertrand Russell*, Vol. 4, London, Routledge, 1994, pp. 436—437.
- (9) Meinong, 'Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung,' p. 391.
- (7) Russell, 'Meinong's Theory of Complexes and Assumptions,' p. 437.
- (8) Russell, *Principles of Mathematics*, p. 49.
- (5) Russell, 'Meinong's Theory of Complexes and Assumptions,' p. 437.